

太田聡先生に捧ぐ

太田先生は、教養部英語科に赴任以来38年もの長きに渡り山口大学の英語教育を支え続け、また人文学部に移られてからの29年間のご専門の日英語の音韻論・形態論の研究・教育および本学ならびに学部・学科の発展と充実に尽力され、このたび、定年によるご退職を迎えられる。

太田聡先生は、1959年に福岡県みやこ町（旧犀川町）にお生まれになった。1978年に福岡県立豊津高校（現、育徳館高校）をご卒業後、熊本大学法文学部に入学され、1982年に同学部をご卒業後、熊本大学大学院修士課程文学研究科（英文学専攻）に、さらに筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科（言語学専攻（英語学主専攻））に進学された。1987年4月に山口大学教養部英語科助手として赴任され、1988年に講師に昇任された。文部省在外研究出張で、1994年8月から10ヶ月間、カルフォルニア大学サンタクルーズ校言語学リサーチセンターで研究に従事された。帰国後、1996年に人文学部に異動され、助教授を経て、2005年に教授となられた。その後は、学内外での実にさまざまな要職を歴任されている。全学では、附属図書館運営委員会委員、共通教育英語部会長、アドミッションセンター主事、国際戦略室主事、時間学研究所兼務所員、学力検査教科部会長などを、また学部内では教務委員、入試委員、就職支援部長、総務部長、異文化交流研究施設研究部門長などを、さらに学外では、日本音韻論学会理事、近代英語協会理事ならびに編集委員長および新人賞選考委員、日本英語学会大会準備委員ならびに学会賞審査委員および外部査読委員、日本英文学会理事および中国四国支部支部長、国立国語研究所共同研究員などを歴任された。

学術研究では、主として日英対照言語学、なかでも音韻論・形態論の分野において優れた業績をあげてこられた。代表的な著作である、『音韻構造とアクセント』（窪菌晴夫氏と共著、研究社、1998年2月刊行）は、生成音韻論の枠組みで日英語の音韻的対照研究の新たな手法を確立した名著として刊行から25年以上経つ現在も読み継がれている。

教育では、太田先生独特の学生との距離感で人間関係を築きながら、多くの優秀な学生を輩出してきた。先生の教育方針は、ご自身の専門分野における丁寧な指導はもちろんであるが、専門分野や所属にこだわることなく、学生の良い芽を見つけ、惜しみなく機会を与えるというものである。このこと

は、現在、太田先生の最終講義と謝恩会の準備中であるが、かなり遠くに住む懐かしい卒業生からお子さんと共に駆けつけたい旨の返信や、他学部の卒業生からの出席希望の連絡からも窺い知ることができる。

また、太田先生は、学生・教職員分け隔てなくご自宅での BBQ やクリスマスパーティーに呼んで下さり、温かい食事と交流の場を与えて下さった。そこにはいつも太田先生のご家族が共にいらした（本を読む猫の Hana-chan を含む）。この温かい環境が先生の研究・教育のすべての原動力であることも強く感じた。

最後に、日本の大学組織に急速な改革が求められている昨今であるが、太田先生の昔のお話を伺っていると、我々は、国立大学がかつて持っていた「良きもの」も改革という名の元に手放してきてしまったことに気付かされる。国立大学の古き良き時代を知る太田先生のご退職を思うとき、大学という研究・教育機関の一時代に区切りがつけられた感じがするのである。

太田先生には、ご退職後は好きな山登りを思う存分楽しんでいただきたいところではあるが、人材不足もあり、共通教育の英語の方では、ご退職後もまだまだお力をお借りせざるを得ない。今後共宜しくお願い申し上げます。

編集委員 上田由紀子